

国語

問一 生

問二 楽しみにしている遠足には新しいズックをはいていきたいので、貧相なズックを見れば見るほど、これをはいていくのはいやだという思いが強くなるから。

問三 ズックの穴をぬってもらったうれしさから照れくさくなり、つい余計なことを口にして、新しいズックを買えない母親を責めて、傷つけてしまったことを（後悔した。）

問四 おこられる

問五 貧しい自分に新しいズックを流されても怒らず、片方が素足のまま文句も言わずに歩く和子の姿に、心の広さを感じるようになっていたから。

問一 1 試行 2 粉 3 大半

問二 世間で有名であることを理由に何となく入った会社で、むだな努力を続けながら、出世したり、成功したりする人に（嫉妬しているということ。）

問三 思考停止が習慣となって、時代の移り変わりに無自覚であるため、過去の成功体験にしがみつこうとするから。

出典は最上一平「糸」。

問一・二 冒頭部分の場面状況を根拠に考えていきましょう。明日の遠足が楽しみで仕方のない拓也でしたが、「前々から遠足にはいていくズックを～今日になっても、まだ買ってもらえ」ずにいることが気がかりでなりません。「ゆうべも母親によく頼んでおいた」のに、母親は「ああ」とか「うん」とか、あいまいな返事（生返事）をくり返すばかりで【→問一】、「何か言うのではないか」と期待した父親も「いつもと少しも変わらなかった」。楽しみにしている遠足だから、何としても新しいズックを履いていきたい。その思いが強くなればなるほど、目の前のズックがいっそう貧相に見えてきて、これを履いていくのは絶対にいやだという思いがさらに強まっていくことになります【→問二】。

〈解答例〉

⑥〈楽しみにしている遠足には新しいズックをはいていきたいので〉、⑥〈貧相なズックを見れば見るほど、これをはいていくのはいやだという思いが強くなる〉から。

問三 新しいズックは買ってくれませんでしたが、母親はズックの穴を縫い合わせてふさぎ、少しでもきれいに見えるよう洗ってくれました。「ボロはボロだけど、前のズックよりはよっぽどましだし」、何より、母親が一生懸命なんとかしようしてくれたことが「うれしい」。「かあちゃん、ありがとう」と素直に言えばいいだけのことですが、拓也の口から飛び出したのは「ちょっとカッコ悪いなア」という文句でした。「笑ってみせ」ていますから、間違いなくうれしい。ただ、その思いを素直に表すのは照れくさいので、つい軽口をたたいてしまっただけなのですが、母親にはそれが伝わっていました。「なんもカッコ悪いことがあるもんか」という「母親の言葉のおわりが、かすかに震えている」のは、新しいズックを買ってやれなかつたことを悔やみ、自分を責めてつらい思いにとらわれているからです。うれしくて、つい余計なことを口にしたために、結果としてつらい思いでいる母親をさらに追い詰めるようなことをしてしまったことに気づいた拓也は、「言わなければよかった、と後悔」しています。

〈解答例〉

⑥〈ズックの穴をぬってもらったうれしさから照れくさくなり、つい余計なことを口にして〉、⑦〈新しいズックを買えない母親を責めて、傷つけてしまったことを〉（後悔した。）

問四 和子の新しいズックを見ているうちに、心の内に「このズックをぬらしてやりたいという気持ち」が起った拓也は、和子のズックを川に浮かべます。そして、そのことに気づいた和子が抗議の声を上げながら、拓也に水をかけ、驚いた拓也の手からはなれたズックは、川に流れ出します。拓也には和子の真新しいズックを「ぬらしてやりたい」という思いはありました、流すつもりはありませんでした。拓也が「かんべん、んでも、流そうとして流したんじゃないぞ」「ながそうとして流したんじゃないぞ。絶対に流そうとして流したんじゃないぞ」「ほんとうに、流そうとして流したんじゃないぞ」と、過失であったことを強調しているのは、故意に流したとなると、そこには和子へのねたみがあつたことになるからです。遠足には何としても新しいズックを履いていきたいと強く願っていた拓也が、和子のズックを見てうらやましくなるのは当然です。和子が新しいから水にぬらしたくないというズックを「ぬらしてやりたい」と思ったのは、やはりいくばくかのねたましさがあってのことでしょう。もちろん、川に浮かべただけで済めば、拓也が胸の内を知られることはありませんでした。ところが、運悪く流してしまったことで、拓也は「おこられるのはしかたがないけれど、少しでもねたましい気持ちが自分にあったことを、知られ」て、その「ねたんだ気持ちがズックを流したんだと言われること」を恐れるはめに陥ります。ところが、必死に弁解する拓也に「いたずらしていたからよ」とは言ったものの、和子には一向に怒ったり、泣いたりする気配がありません。「自分が新しいズックを買ってもらえないから、私のズックがうらやましくて、流したんでしょう。正直に言いなさいよ、この貧乏人が！」などと言われるのは気が重いものの【→問四】、「じやり道に裸足の右足を（痛くないよう）そっと置くようにして、一歩ずつ進む」和子の様子は、いつそのこと「口ぎたなくののしられたり、悪口を言われたほうが、どれくらい気がかるくなるかしれやしない」と拓也に思われるほど痛々しいものでした。

問五 新しいズックを川に流されても、痛みに耐えながら素足でじやり道を歩いても、和子が拓也を強く責めることはませんでした。自分の内にあるねたましい思いをとがめられることはどうやらなさそうですが、そうなると今度は、何も悪くないのに、ズックを片方なくされ、痛い思いをしながらじやり道を歩く和子への申し訳ない思いがつのってきます。素足をかばいながら歩く様子に「ズキンと胸が痛く」なった拓也は、思わず自分のボロボロのズックを和子に差し出します。この時、「面と向かっ」て「和子の顔をじっと見た」拓也は「今まで何度も見てきた」はずの和子の顔が「拓也の知っていた和子とはちがっているように」感じます。この部分については、今まで気づかなかった和子の新しい一面を見た、というところまでは読み取れるのですが、拓也がこれまで和子をどのように見ていたのか、という点を本文から読み取ることがなかなかに難しい。そうなると「新しい和子」を特定することも困難になります。遠足に出発する場面で、「はなやいだ雰囲気」の「和子にだけは、ぬってあるズックを知られたくないと思った」とありますので、和子の家が裕福であることを拓也が意識していることは確かです。その後、ズックを流してしまうという出来事を経て、和子の新しい一面を発見、に至ります。「裕福な和子」と「貧乏な拓也」という対比は文章全体にわたっていますので、このあたりから「新しい一面」を推測していきましょう。新しいズックを履く和子をねたむ気持ちはありました、だからといって、ズックをわざと川に流すようなひどいことをしたつもりはない。そのことだけはわかってほしいと拓也が必死に願った理由は、家が貧しいのは仕方がないにしても、性根まで腐っていると思われたら、裕福な和子との差が決定的になってしまうというところにありそうです。遠足の次の日、川に一人でいる和子を見つけた拓也が、当然のように近寄って、そのまま二人でナマズを追い始めたことから考えると、二人はふだん、特にわだかまりもなく一緒に遊ぶ仲であったことが分かります。ここで、もし「和子をねたむ思い」が明らかになれば、当然二人の仲は裂かれることになりますし、状況から考えると、そうなる可能性は高かったと考えられます。拓也が自分の心の内を見透かされることを恐れていたのも、このことを裏づけています。ところが、和子は何とも思っていませんでした。拓也の家が貧しいかどうかなど、和子の方はまったく気にしていなかった。ズックが流されても、素足で痛い思いをしながら帰ることになっても、和子が拓也のことを責めることはませんでした。その潔さ、心の広さに救われた拓也は、「流そうとして流したのではないけれど～その事実からは逃げられない」と自分の非をはっきりと認め、「わざと裸の足に力を入れて」歩き、その「体を通りぬけ」る「痛み」によって、自分を罰しています。

〈解答例〉

- ④〈貧しい自分に新しいズックを流されても怒らず〉、④〈片方が素足のまま文句も言わずに歩く和子の姿に〉、⑤〈心の広さを感じるようになっていた〉から。

〔二〕 出典は山田玲司「非属の才能」。

問二 筆者は自身の考える人の生き方、考え方について、大きく2点に分けて説明しています。ここでは「定置網（にはまる）」「うさぎ飛び（をする）」「出る杭（に嫉妬する）」という3つの比喩を使って説明されている部分を読み解きます。「人生で自分が使えるエネルギーには限界がある」のだから、「どの部分に（限られた）エネルギーを注ぐべきかを考えなくてはならない」と考える筆者は、「チェーン店で身を粉にして」働く人を例に挙げて説明を進めていきます。「携帯電話でも買うように」、すなわち「ただなんとなく有名だから（このチェーン店で働くか）」などと「漠然とした理由」で「仕事を選ぶ（定置網にはまる）」と、「体に悪いうさぎ飛び」のような「意味のない努力」をする「羽目になりかねない」。もちろん、同じ会社に入り、「成功しているチェーン店で商売のイロハを学び」独立して自分の店を出した人や、「将来的には本部の社長になりたい」という夢を持って、着々と出世していく人もいるでしょう。筆者はしかし、「定置網にはまって、うさぎ飛びをしている人」は、そういう「出る杭」たちを羨むばかり（嫉妬している）ということになるだろうと警告しています。

〈解答例〉

- ④〈世間で有名であることを理由に何となく入った会社で〉、④〈むだな努力を続けながら〉、④〈出世したり、成功したりする人に〉（嫉妬しているということ。）

問三 次に筆者は「時代が移り変わっていることに無自覚」であることの問題について説明しています。「魚が捕れない」と嘆く漁師が「かつて大量に魚が捕れた漁場」を目指すのは、そこに魚がいるかもしれないからと考えてのことです。しかし『いま』はすでに『かつて』ではなく～高い漁場だったりする。漁師がそのことに思いが至らないのは、「思考停止という習慣」によって、「時代が移り変わっていることに無自覚」となっているからです。「今はどうなっているだろう」という観点がなければ、「かつては良かった」という「成功例」に頼る以外に道はなくなってしまう、ということになります。

〈解答例〉

- ④〈思考停止が習慣となって〉、④〈時代の移り変わりに無自覚であるため〉、⑤〈過去の成功体験にしがみつこうとする〉から。